

を見送るしかなかった。

20 (道中の) 港では船尾がこわれかかった船が(私たちを)迎えるのみであった。

### 【三段】

21 太宰府までの宿駅は五十余り(泊りを重ね)

22 太宰府までの行程は千五百里であった。

23 (やっと着いた) 太宰府南楼のもとで、(今までの行程を伴にした) 疲馬を解放し

24 (私のこれからの住み家となる官舎のある) 右郭のほとりで下車した。

25 (車から降り立って) 小閣(くぐり戸)を開いてみると

26 好奇心に満ちた人々が南北の道にあふれて見つめているのがはつきりみえた。

27 気分が悪くなり、吐いてしまったが、それでも胸はまだむかつきがおさまらなかつた。

28 体は疲労のため衰弱してしまつた上に、脚までもががまつてしまふ始末。

29 (かつて丸々と) 肥っていた肌には苦勞によるしわが、我先きを競うかのように深く刻み込まれ、

30 精神と気魄も、ともに(墨を磨るように)ほとんど擦り減つてしまつた。

### 【四段】

31 とりあえず仮の宿舎に二泊したが、所詮は旅先の気分で落ち着くことができない。

32 気分が勝れずぼうぜんとした今の心境は、まさに逆さ吊りされたような非常な苦しみである

33 (宿に) 村の老人がやってきて、昔話を語ってくれると、

34 (この太宰府に) 留め置かれてゐるわが身の辛さを(片時だけでも)忘れさせてくれる。